レンズが泣いた

今日 1 月 17 日で、あの阪神淡路大震災から 23 年が経つ。確か火曜日で、名古屋も地震の揺れを感じたが、関西の被害を気にしながら非常勤の講義に出かけた。名古屋市立女子短大の研究室で被害の全貌が分かるにつれ、大きな衝撃を受けたことが忘れられない。

写真は『AERA 臨時増刊』1995 年 2 月 25 日号。この時は、「関西大震災」写真記録となっている。当時、多くの写真集などを手に入れたが、退職や引っ越しで、図書館や知人に寄贈・進呈した。たまたま手元に残っていたのが、この写真集である。23 年前の記憶を思い起こすために読み返し、レポートに記録することにした。

小島章夫副編集長の「無数の悲劇を忘れないために」から―マスコミは数字が大好きです。「死者 5200 人」「倒壊家屋 10 万戸」「30 万人が避難所に」 たしかに、こうしたデータによって被害の凄まじさ、「規模」を知ることはできます。しかし、とらわれすぎると、数字だけで今回の大震災が分かったような気持ちになって、この大惨事に翻弄された一人一人の「人間」が見えにくくなってしまうような気がするのです。一回きりの人生を、理不尽な力によって無理やり終わらされた死者たちの無念の叫び。生き残ったものの、突然家族や恋人と引き裂かれた人々の痛憤。築き上げてきた一切を失った被災者のあまりにも困難な未来。そうした無数の悲劇のひとつひとつを忘れないために、さらには残された人々の手厳しい現実に、一人でも多くの人々が、心の底から思いを寄せ続けることができるように、そう念じてこの写真集をつくりました。犠牲者の方々のご冥福を改めてお祈りしたいと思います。この種の報道のあり方をめぐって、マスコミはしばしば批判されてきました。今回も例外ではありません。撮影してきたカメラマンはどんな思いだったのか。「20 人の証言」を通して、実像の一端を知っていただければ幸いに存じます。

証言の一部から。「ファインダーをのぞく目が血で雲った」「人間が、必死になって人間を助けた日」「悩んで悩んで悩み抜き震えながらシャッターを切った」「逆の立場なら怒鳴るだろう」「そっとつぶやいたごめんなさい」

写真下は神戸市長田区の菅原市場(2 月 3 日)。ここは震災から 1 ヵ月後に訪れた。その後も何回か訪れ、大震災を心に刻んできた。寅さん「最終回」、菅原市場跡のシーンを思い起こす。神戸長田も近くになったので、久しぶりに訪ねてみよう。

(2018 年 1 月 17 日)